

趣味と国益（下）

畠山 襄 *Noboru Hatakeyama*
(一財) 国際貿易投資研究所 理事長

前号では、日吉章氏からの「油絵を習わないか」という満州平野を疾走する列車の中での願ってもないお誘いに、二つ返事で賛同したところまでご説明した。そこで今回は、その結果がどうなったかをご説明する。

日吉氏の紹介で僕ら二人が油絵を習うこととなったのは、松木重雄先生という筑波大学の名誉教授で、勲二等を授与され、海部俊樹元総理や中山善郎元コスモ石油会長なども習っておられた大物中の大物である。この先生が偉いのは、やたらにご意見を仰らないところだ。生徒が具体的に先生のご意見を求めたときだけご意見を仰り、あとは放置しておかれる。初めてレッスンを受けた時、「お見受けすると、お二人ともデッサンから始めたのでは間に合わないや」と言われて、いきなり絵の具を使うことを赦してくださった。

こうして数年のうちに小生のつたない絵も何点かが展覧会で恥を曝し、何冊かの雑誌の表紙を飾り（汚し?）、何枚かの絵葉書にもなった。出来の悪い子程かわいいものだと言われるが、自分の描いた絵も同様で、この愛しさは絵のお上手な方々には理解できまい。それでも、そのつたない絵から国際的な交流が生まれたり、深まったりすることがあった。

まず、ドイツ経済省の故ショメロス次官との交流であった。同氏を訪ねた時、昼食をドレスデンで取ることになり、エルベ川の一部を一望できる、とあるレストランのテラス席に腰を下ろした。私はたまたまこの辺りを一望する「エルベ川のほとりで」という絵を仕上げたばかりであったので、その絵を絵葉書にして恭しく彼に進呈した。すると、ショメロス氏はその絵ハガキ

を片手に語り始めた。

「貴方はたまたま川のこちら側から、向かって左側の大きな建物であるザクセン州の財務省と——どこの国でも財務省の建物は首相府の建物より大きいがね——、向かって右側の橙色の屋根のザクセン州の首相府などを描いたわけだ。今では首相府と財務省の間に貴方が描いた頃にはなかった同州経済省の建物があるがね。250年前、貴方とは反対の方向からこちら側を描いた『もう一人の画家』（!）がいた。その画家はカナレットというイタリア人で、精密な都市の風景を描くことで当時から有名で、ドレスデンやワルシャワの絵も描いた。第一次および第二次世界大戦で完膚なきまでに破壊されたこの両都市は、そのカナレットの絵に基づいて復興したのだ」

私はショメロス氏の博識ぶりに大に関心させられた。その後、ポーランドの首相がジェットロ理事長であった私を訪問した時に、ショメロス氏から伺った話が本当かどうか聞いてみた。同首相は「本当だ」と答え、どうしてそんなことを知っているのか、と逆に質問された。

次にご紹介するハンガリーの首都、ブダペストの絵は意外な展開を見せた。当初、ドナウ川流域の美しい風景を写真に撮って絵の題材にすることを小生は楽しみにしていたのだが、時間が取れず、僅かにフィッシュ・マーケットの写真が撮れただけであった。しかし、撮った写真を焼き付けてみると、一面の石畳が見事に撮れていた。私はそれを基に丹念に石畳を一つ一つ磨き上げるように描き、翌年冬の通産OB絵画展に出展した。

この絵を評価する人は少なかったが、その少ない中に当時の駐日エジプト大使マフムード・カレム氏がおられ、御本人が絵画展に足を運んでくれたのだ。それが、次に述べる小事件の発端だった。

通産OB絵画展の後、私はカレム大使主催のディナーに招待された。私の席は日本の国会議員と同じテーブルの上席で、某ヨーロッパ大国駐在の元日本大使の席よりも上席であるなど、その待遇は面映ゆい程であった。その席でカレム大使は小演説を始めたが、中味は私の絵についての話が多く、外交官としての「外交辞令」の部分を割り引くとしても大変大袈裟な贅辞で、「穴があったら入りたい」というのはこういう時に使うのだろうと思った。

大使の話は続いた。

「私は畠山氏の絵の前で55分間立ち止まって動けなかった」

問題が深刻になったのは、大使が次のように話して演説を終えてからだ。

「私は決めた。畠山氏の個展をカイロで行うと」

私は耳を疑った。通常、この種の話は下から上がってきて、事務的な検討を経た後に最終決定されるものだ。それを本件は事前連絡もなしにいきなり、いわば公衆の面前で提案されたのである。私は驚き、狼狽もして、直ちに大使に「今後どうすればいいのか」と聞いた。すると大使は答えた。

「今、この席にエジプト文部省の次官がいるので、彼と打合せればいい」

私はエジプト文部省次官との会談など全く予定していなかったが、同省次官が席を立つ機会があったので、私も席を立ち、「今の大使の話は初耳なので、どうしたらいいか」と私が聞くと、先方は「貴方が今まで開いた個展のカタログを英訳して、エジプト文部省に送ってくればいい」と答えた。私が個展など一度も開いたことがない旨伝え、先方は「今まで何枚描いたか」と聞くので、10枚位と答えた。すると、さすがに先方も「10枚では個展にならない」と云った。

通常なら、そこでこの話は終わりになるところだが、こんな突然の話は受けるべきでないという声と、一方では折角の話なので受ければいいではないかという二つの声の中で交錯した。そこで、私が「出展は一人でなく数人でもいいか」と提案すると、先方は承諾した。我ながら随分心臓が強いと思ったが、私と同じ先生に絵を習っておられるという理由で海部元首相に御願ひし、結局、海部元首相と松木先生および小生の3名とその他一般の方の出展で、カイロでの個展が実現したのであった。

3点の絵画のうち、海部元首相と松木先生の絵が、日本・エジプトの文化交流の促進という国益の増進に大きく貢献したことは疑いない。とすれば、それらを引き出す要因となった小生のフィッシュ・マーケットの絵のささやかな貢献も、それなりの役割を果たしたのではないか。